

*「ポレーシェ」とは チェルノブイリ付近の湖沼低地帯をいう



日の出ずる国、働く人々の国

今年2月、私は日本を訪問する機会に恵まれました。東京と福島で行われた、「福島復興のためのシンポジウムとセミナー」への公式な招聘によるものです。ウクライナから、「チェルノブイリ救援・中部」とすでに20年にわたり協力している「チェルノブイリの人質たち（ホステージ基金）」が参加できたのは、とても嬉しいことでした。

シンポジウムへの参加者たちは、自分たちの任務の重大さを理解していましたから、誰もができるだけ多く語ろうと努めました。「自分の経験や土壌・大気・水の放射能軽減技術」「悲しみに打ちひしがれる人々を団結させサポートする術」「自分の健康に配慮して何に注意を払うべきか」、また「政府に対し原子力政策の誤りに責任を取らせる手段などについて」等々。チェルノブイリ事故から25年が経ち、「平和利用」であるはずの原子力がもたらした影響に対する私たちの闘いの経験は、福島県の住民にとって大いに参考となるでしょう。地元の方々の反応は、感嘆と尊敬の意を呼び起こすものでした。彼らが率先して警鐘を鳴らし、彼らにとって関心のある質問を飽くことなく浴びせ続けたのです。彼らは、日本の官僚たちに枕を高くして眠ったりはさせないでしょう。そして、環境汚染との闘いの計画を、自ら立てていくことでしょう。

津波で被災し、家族と家を失った人たちの悲劇にも、衝撃を受けました。彼らは、何代にもわたって伝えられてきたであろう家族の記念品をも、一瞬にして失ったのです。

ウクライナに戻って、そのような惨事に見舞われた日本の将来はどうなるのかと聞かれた時、私はいつも津波の跡のがれきを片付けているボランティアを例として挙げました。それは、全く私心のない人たちが行っている巨大な仕事です。11ヶ月の間に彼らがなしとげた仕事の成果は、本当に感嘆に値するものです。それほど多くの作業を、しかも当初からごみの分別をしながら行えるのは、日本人だけでしょう。このことだけでも、日本の方々に深くお辞儀をしたい思いです。ですから、インタビューを受けるたびに私は言うのです。「日本は津波の被害を、ごくすみやかに、外国からの支援なしで克服するでしょう。日本はより力強く豊かになるでしょう。世界一勤勉な民族なのですから！」

そして私は、哲学的な言葉でこの記事をしめくりたいと思います。人間は自らの運命の主人であり、状況に屈服することなく、自分と自分の子ども達の命のために闘わなければなりません。私たちが皆さんとの友情を結んだ1990年以来、皆さんはこのことを私たちに教えてくれました。今、私たちが皆さんをサポートし、示唆を与える時がきたのです。 私たちは皆さんとともにあります！

（ホステージ基金 E.ドンチェヴァ）



〒466-0064 名古屋市昭和区鶴舞3-8-10 愛知労働文化センター 地下1階

NPO 法人 チェルノブイリ救援・中部

銀行 名：三菱東京UFJ銀行 名古屋営業部（店番号150）

□ 座 番 号：普通 6949211

□ 座 名 義：特定非営利活動法人チェルノブイリ救援中部 理事長 神谷 俊尚

郵便振替：00880-7-108610

TEL / Fax：052-732-7172（月・水・金 10:00～17:00）

ホームページ：<http://www.chernobyl-chubu-jp.org>

2012年5月 第7回スタディツアー参加者募集!

日程：5月14日(月)～24日(木)

費用：245,000円/人

締め切り：定員になり次第。

私は、チェルノブイリに行きたい!

(航空チケットは10名分確保しています。お申し込みは、お早めに)

2012年5月 現地時間			日程	宿泊地
1	14日(月)	07:30 09:25 22:30	中部国際空港出発ロビー集合 時間厳守! 中部国際空港 発(大韓航空 752) ⇒ソウル(乗換え)⇒モスクワ(乗換え) ⇒キエフ 着	キエフ
2	15日(火)		キエフ市内視察	キエフ
3	16日(水)		30 ^{キロ} 圏内視察(原発・旧プリピャチ市など)	キエフ
4	17日(木)		ジトーミル市内視察	ジトーミル
5	18日(金)		病院・学校訪問など関係者との交流	ジトーミル
6	19日(土)		ナロジチ市へ 菜の花プロジェクト視察	コーラステン
7	20日(日)		市民交流会	コーラステン
8	21日(月)	15:10 16:15	キエフ・ボリスポリ 発(チェコ航空 917) プラハ 着	プラハ
9	22日(火)		プラハ市内観光	プラハ
10	23日(水)	18:55	プラハ市内観光 プラハ 発(大韓航空 936)	機中
11	24日(木)		ソウル(乗換え)⇒ 14:20 中部国際空港 着	

(朝食9回、昼食6回、夕食6回)

私たちは、チェルノブイリ原発事故が起きてから今までの20数年間、事故処理作業員や30^{キロ}圏内から避難した人々、汚染地域に住み続ける人々などに会い、お話を聞き、お金や物だけでなく心の支援を続けてきました。

そして、訪問した時によく言われました。

「日本のような小さな島国に、54基もの原発がある。もしも事故が起きたら、次は私達が支援をする…」と。

昨年3月の東日本大地震により、福島第一原発で、危惧していた大事故が起きてしまいました。

事故から26年経ったウクライナ現地を、自分の目と耳と足で確かめ、たくましく生き抜いてきた人々と出会い、「私たちは何をすべきか、どのように生きるべきか？」を学ぶ機会にしましょう。(美)



3.11 メモリアルイベント

「大震災／フクシマ原発震災パネル展」 (市原)

東日本大震災から 1 年、名古屋で行われたメモリアルイベントのひとつ『大震災／フクシマ原発震災展～1 年後のすがた』(3 月 2 日～4 日「未来につなげる・東海ネット」主催 於：名古屋市市政資料館)を見てきました。

東海地方の NGO による 1 年間の活動を展示しており、「救援・中部」も出展しました。各団体の力を尽くした活動の報告は、どれもたいへん見応えがありました。それまで行ってきた自分たちの活動を生かした、もしくはまったく未知の分野に足を踏み入れ行ってきた活動の数々。原発事故を環境問題として支援している NGO、核問題として訴えている NGO、エネルギー問題として考えている NGO…などなど。中でも「サギップ・ミグランテ・ジャパン」の活動が目をひきました。以前より、東北地方の農業・漁業に携わっているフィリピン人を支援している団体で、今回の震災で日本人以上に過酷な被災状況に陥っているフィリピン人たちを、手厚く支援しているのです。こういった支援は一朝一夕にできるものではなく、常日頃よりフィリピン人のコミュニティに深く入り込んでいる団体だからこそできるのです。

名古屋市市政資料館は、AKB48 のグラビア撮影にも使われた名古屋の新名所。たまたま立ち寄ったカップルが、思いのほか迫力のある展示に見入っている姿が印象的でした。私達は、この震災・事故を風化させないために、市民の方々に「東北の今」を伝えていく使命を、改めて感じました。

3.10 いのちの集会 脱原発デモ／パレード + キャンドルナイト

3.11・福島原発事故から一年を迎え、「いのちの集会」(主催：3.10 さよなら原発アクション in あいち実行委員会)が、3 月 10 日(土)に名古屋市久屋大通公園内・久屋広場で開催されました。国内すべての原発の永久停止や廃炉を求める誰もが、ともに思いを寄せる場所として、また、3.11 のすべての犠牲者のための慰霊・追悼の機会として、企画されました。会場では、サイドイベントとして、オーガニック飲食店・フリーマーケット・資料展示・ぬり絵・おもちゃ作り・朗読・ライブバンドなどが、盛りだくさんに行われました。

脱原発集会では、原発問題を抱える各地域から報告があり、福島から一家で避難を余儀なくされ岐阜に在住の佐藤さんからは、報道では語られない福島の実況についてのお話や、福井県の大飯 3・4 号炉の再稼働反対が訴えられました。

また、その後のデモ／パレードでは、子どもを連れたパパママ世代を含む幅広い市民が参加し、中部電力本社前を通る時には、いつ起きてもおかしくないといわれる東海・東南海地震による静岡県の浜岡原発への影響・不安など、脱原発のシュプレヒコールを行いました。10 代 20 代の若者から年輩の方々まで参加して、「大ナゴヤ大サウンドデモ」ともコラボし、にぎやかでした。

陽の落ちた頃始まったキャンドルナイトでは、会場に並べられた手づくりキャンドルに火がともされ、震災で犠牲になった方々に想いを込めたメッセージも添えられて、幻想的な明かりの中、祈りの一時となりました。(戸村)



南相馬便り (神谷 俊尚)

1) 昨年の原発事故以来、警戒区域(20Km 圏内)、計画的避難区域、特定避難勧奨地点、緊急時避難準備区域(30Km 圏内 昨年 9 月末解除)と指定をしてきた区域を、政府は 4 月中には 3 区域へ再編すると発表し、現在各市町村との確認作業に入っている。再編後の 3 区域内の推定人口は 87,000 人。

4 月からの国、市町村による除染作業を通して行われる内容は…

- ① **帰還困難区域**(年間被曝線量 50 mSv 超で、5 年以上帰還ができない。)
国が除染のモデル事業を行い、線量低減に向けた効果的方法を探る。
- ② **居住制限区域**(年間被曝量 20~50 mSv で、5 年以内に帰還できる可能性がある)
26 年 3 月末までに放射線量を 20 mSv 以下にする。
- ③ **避難指示解除準備区域**(年間被曝量 20 mSv 以下で、インフラ整備完了後帰還可能)
25 年 8 月末までに住民の被曝線量を半減させ、長期的には 1 mSv 以下にする。 …とされた。

南相馬市では、小高区の大部分が警戒区域から**避難指示解除準備区域**に指定されそうだが、線量の高い山沿い地区は**帰還困難区域**、**居住制限区域**に指定されそうな様子で、またもや市内が 4 分割され、更なる地区と人の分断に拍車をかけようとしています。

小高区は津波被害の後片付けが全然できておらず、地震による家屋の倒壊、道路・水道配管等のインフラ被害が甚大、その上 3.11 以降緊急避難の為に、屋根瓦破損のみの家屋も破損場所から雨が入り込み、住めなくなっている状態で、新たな問題が発生しています。**原町区・鹿島区**は、4 月から(株)竹中工務店中心の企業が 400 億円(2 年間)で市から除染を請け負いましたが、いまだに仮置場が決定しておらず、本格的・効果的な除染作業が実施されるのか疑問視されている現状です。

2) 福島県が食品測定器を 500 台購入し、各市町村へ配布。南相馬市には 47 台が設置されます。保育園・幼稚園・小中学校・給食センターに各 1 台、生涯学習センター(7 ヶ所)と市交流センターに各 2 台設置し、測定員も配置します。ただ、1 検体にかかる測定時間は 20 分、検出限界値は、Cs134,137 とともに 25 Bq/Kg 合計 50 Bq/Kg で、3 月中旬から測定を開始しています。**A&S 福島運営の「放射能測定センター・南相馬」**には、名古屋市の支持者から寄贈される 2 台目の測定器が 3 月末に設置され、4 月からは合計 2 台で測定を始めます。私たちの測定は、基本的に 30 分測定で 10 Bq/Kg の検出限界を守り、場合によれば 1 時間以上の測定を行い、より丁寧に、市民の皆様の安心に寄与して行きたいと考えています。

市は当然無料で実施しています。**A&S 福島**の「測定センター」も議論を繰返す中で、畑の実験的試料や市内の水道水の定期的な測定を実施し、研究資料として助成申請をする中で、活動資金の確保を計り、市内在住の皆様には無料で測定を行う事と決定しました。

厳しい運営を強いられますが、市民目線を失うことなく続けていく覚悟です。

3) チェル救が福島県で活動を始め手がかりとなった、南相馬市内汚染測定作業は、昨年 6 月と 11 月の 2 回行い、「南相馬市放射線量率マップ」として市民の皆様に公開してきました。昨年 2 回の調査の結果では、西側の山沿いから東側の海沿いに向けて、放射線量に 20 倍近くも差がある事、6 月と 11 月を比較すると空間線量は低減してきていることなどが判明しましたが、冬を乗り越え、春になり花粉が舞い散るこの季節に、空間がどのような状況になっているのか、測定調査が待ち望まれます。

4 月の実施予定は 4/14、15 と原町区、4/21、22 と鹿島区の予定です。また、小高区の避難指示解除準備区域指定に伴い、小高区内への立入規制が緩和される見込みもあり、いつでも測定が開始できる準備を行っています。今回も、チェル救募集のボランティアと南相馬市民のボランティアが協力しあって測定作業を行い、5 月中には第 3 回目のマップを発表いたします。



〈南相馬市「野馬追通り銘醸館」にて(2012.02)〉

南相馬から元気発信 (A&S 福島 高橋 慶)

皆様こんにちは、アクティブ&セイフティー福島 (A&S 福島) の高橋です。

さて、A&S 福島の近況です。**食品汚染検査業務**は、南相馬市は農作物の作付け自粛や、今まで冬の間に収穫できる作物が少なかったという事もあり、検査依頼は少ない状況でした。

今、市民が一番心配であろう水道水の定期的な検査を独自に行い、市民に対し発信しています。ところが、情報を発信できるアイテムが不足しているため、なかなか大勢の方の不安を払拭するまでには至っていません。というのも、南相馬市の行政でも検査はしていますが、市民の行政に対する不信感が根深く、「市役所が行う検査は信用できない」と言う意見も多く耳にします。この不信感を一瞬で解消するパワーは私にはありませんが、出会った一人一人と真剣にお話をさせていただき、理解を深めるしかないと思っています。

因みに、南相馬市には現在 20km 圏内のため立ち入りができない小高区を除いた、原町区・鹿島区、合わせて5つの水源がありますが、**すべての水源を A&S 福島で検査した結果、放射性物質は検出されておられません。**

先日、2月18、19日の両日、**南相馬ダイアログフェスティバル**を開催しました。

フェスティバルの中では様々な「対話の場」「子ども達が楽しむ場」、大人も楽しむために「加藤登紀子さんのコンサート」「ウォン・ウィンツァンさんのピアノコンサート」などを催しました。両日とも大勢の方々に来場していただき、とても嬉しくまた充実した気持ちです。そして、またまた報告ですが、この原稿を書



いている、まさに今、南相馬市鹿島区「万葉ふれあいセンター」にて「みんな共和国」が開国しています。

この企画は、南相馬ダイアログフェスティバルの中の「お父さん会議」から出てきた「放射能の心配をせず、おもしろい子どもを遊ばせたい」…そんな声を聞いた私たちダイアログの実行委員と、なんと南相馬市役所が共催で始まった、子どもの遊び場作りの企画です。

連日、大勢の子どもで賑わって、大人たちはクタクタですが、まだまだ頑張ります。

食品測定してみて (山田 順子)

冬の時期は、家庭菜園も作物を作っていない時期なので、測定物は各家庭で消費する米や井戸水の依頼が主です。地元は、作付け制限で米の作付けは行っておりませんので、持ち込まれる米は近隣地域産や県外産です。検査結果も低い値、または「検出せず」です。地元南相馬市の山菜としては、出始めたフキノトウを測ってみました。20Bq/kgの数値、食べるか？食べないか？は個人の判断です。

地域の山菜や野菜の収穫が始まる、4月以降の地物野菜の測定が一番の関心事です。「新基準値」を安心材料の目安とするのではなく、精度の高い検査により、内部被ばくを極力少なくして行きたいものであります。



ウクライナ訪問 トピックス

2月26日～3月9日（兼松 真梨子）

●「ナロジチ再生・菜の花プロジェクト」終了を迎えて

2007年からスタートした「ナロジチ再生・菜の花プロジェクト」が、間もなく終わりを迎えようとしています。5年間の研究成果が、ディードゥフ氏らの協力のもとまとめられることとなります。

3月1日（木）、現地報告会をナロジチ地区の行政庁舎にて行いました。



・ナタネ栽培による土壌浄化

5年間にわたる土壌分析の結果によると、土壌中の放射能減少率は年間3%ほどで、プロジェクト開始当初に期待したほどの値ではなく、完全に土壌が浄化されるには、30年以上という長い年月がかかることになります。しかし、ナタネを栽培した後の裏作物（蕎麦やライ麦、小麦など）には、放射能による汚染が極めて少ないことが実験からわかりました。これは、「汚染があるために食用作物は作れない」という今までの認識を打ち消す、大きな成果でした。日本でも、放射能による土壌汚染による農家への打撃は大変大きく、この研究結果が、日本の地でも活かされることを期待したいと思います。

・バイオディーゼル／バイオガス

BDFによる農機具の運転も実証済みで、コストも市販の燃料とほぼ同じであり、今後産業化も可能であるとのこと。残念ながら、今は冬期のため作業がなく、トラクターを動かしている様子は見られませんでした。

BGについては、寒冷地のため冬期にガスが発生するか心配されていたのですが、BGプラントのある貨車から200mほど離れた牛舎でも、実際にコンロの火がついたのを確認できました。寒冷地でも十分使用可能だということがわかり、農場主のカヴェツキー氏も大変嬉しそうでした。（原さんの苦勞が報われましたね！）小さいものであれば個人でも手造りが可能で、カヴェツキー氏は「もう少し大きいBG装置を自作したい」と考えているようです。

・大規模化に向けて

チェルノブイリとナロジチ地区行政、農大との協働で行ってきた「菜の花プロジェクト」。まだ、放射能の吸着実験が残っているものの、ナタネ栽培は今年の6月に収穫を迎えます。これからは、住民の手によって「実験」から「実証」へ向けての、大規模化プロジェクトが始まることになるでしょう。今回の派遣の目的の一つであった、州行政との話し合いには、我々のカウンターパートであるホステージ基金、ディードゥフ氏、ナロジチ地区行政長、ナロジチ地区議会議長が出席し、また、地元のテレビ局やラジオ局の取材陣が数名いて、この様子はニュース番組でも放送されました。前回7月の派遣団の時にも大規模化の話は出ていたのですが、あまり本腰でない様子だったそうです。今回は、議論も途中からヒートアップし、通訳が追い付かないほどでした。私はただボカンとするしかなかったわけですが、どうやら州行政としても予算を組むべく、「州議会にかけて予算承認を得たい」と話がまとまりました。今後の動きに注目です！

●被災者3団体(事故処理作業員)へのヒアリング

「障害者基金」「リクビダートル基金」「消防士たち基金」の3団体との面談を行い、事故当時の仕事や避難の様子、現在の健康状態、国による被災者保護政策などについて、ヒアリングを行いました。

3団体ともあげた大きな問題は、医療制度や保養・年金が十分に支給されないことです。無料で効果のある治療はほとんど受けられず、事故後25年経ち、高齢で慢性疾患を抱えている場合も多く、自力での治療は困難です。保養の日数もだんだんと減り、年金も少なく生活は苦しい。市内の公共交通は無料で、電気や

水道などの公共料金は半額補助されるので、その点は助かっているそうです。ソ連時代に、さまざまな被災者保護のための法律ができたが、今のウクライナではあまり重要視されておらず、ほとんど機能していないそうです。しかも、昨年できた内閣令によると、「国に予算がない場合、被災者保護のための法が履行できなくてもやむを得ない」と認められたそうです。これには大変驚きました。また、障害者資格の認定や更新などには、多くの証明書などが必要となり、新たに認定を受けることは難しく、裁判になってやっと認定されるような状況で、ここでも国への不満が見えました。

そして、当時原発の運転職員や原発警備員をしていた方から、当時の様子を聞きました。原発の運転職員をしていたゲルマンチュク氏は、4月26日、事故が起きたことを知らずに出勤。すでに爆発したあとで、燃え盛る最中だったそうです。「現場に入る前に、多くの人が病院へ搬送されていった。つながっていた3号炉へ燃え移っては危険なので、測定器も持たずに3号炉の停止作業にあたっていた。原発から1.5キロほどの町プリピャチに住んでいて、翌日にバスで避難した。当時9歳の娘と8カ月の息子も病気が多く、現在もあまりよくなく治療中。」また、軍に属していて原発警備員をしていたヴォズニューク氏は、「4月27日から1週間勤務し、神経的な緊張も多く、不安感や吐き気、激しい下痢、眠気、口の渴きや鉄の味がする、鼻血が出るなどの症状があった。」と生々しく語ってくれました。ソ連の軍人であれば、放射能について一通りの知識は持っていたそうです。「プリピャチから避難する時は、3日間ほどの避難だと聞かされたが、5月に入ってから行われた村の避難では、3ヵ月ほどと言われた。」避難する時また帰れると思いませんか？と尋ねると、「もちろん戻りたいと思っていた。」と口をそろえて答えてくれました。でももう帰れないだろうとその日に思ったそうです。「なぜなら、この目で原発が燃えるのを見たからです」と。それでも検問をいくぐって、自分の家に戻ろうとする人もいたとも聞きました。福島のことと重なり、とても胸が痛くなりました。また「消防士たち基金」では、「ナロジチ地区の廃墟などが火事になると消火作業にあたるが、線量も高く今も被曝の危険にさらされている」と、事故から25年経っても放射能の影響が続いていること、しかし、市民には少しずつその感覚が薄れていっていることを、危惧されていました。今も、汚染地域のキノコや木の実などを食べていることによる健康被害の影響は、大きいそうです。



●季節外れのサンタクロース

税関でのトラブルにより、クリスマスまでに届かなかったクリスマスカードを、ジトーミル12番学校・25番学校・ナロジチ町幼稚園・コーラステン消防局にて、直接お渡しすることができました。2つの学校や幼稚園では、いずれも子ども達による歓迎の歌や劇などで迎えられ、とても感激しました。ウクライナの子ども達はとても堂々としていて自信があり、カッコよく見えました！日本から持っていた日の丸国旗を広げた瞬間、歓声が沸いたのには驚きました。季節外れのサンタでしたが、私の方が子ども達の笑顔にエ

ネルギーをもらいました。(サインを求められて子ども達に囲まれるという、芸能人気分を味わうこともできました！)

初めてのウクライナ派遣で緊張もありましたが、実際に関係者の顔を見て話ができただけは、大変よかったと思います。事故当時の貴重な話も聞くことができたし、また会計としても、毎日の事務的な業務がこうして現地の人の生活につながっているのかと、実感することができました。

「百聞は一見にしかず」ですね！でも「一見」ではわからないことばかり。また訪問できる日を、そして今回は見るのができなかった菜の花畑に行ける日を、楽しみにしています!!!



「ナロジチ再生 菜の花プロジェクト」がスタートした 2007 年から、丸 5 年が経過した。バイオディーゼル装置の設置やバイオガス装置の建設などに伴う多くの困難はあったが、関係者の真摯な努力と熱意がそれらを克服した。チェルノブイリの問題解決の努力は、図らずも福島原発震災の問題解決につながろうとしている。一刻も早く原発のない社会を実現するために、「チェルノブイリから福島へ」これが今後の合言葉である。

菜の花プロジェクトの始まり

チェルノブイリ救援・中部発足当初は、ソ連崩壊直前の経済困難状況で、医療機器や医薬品提供などに多くの努力がさかれた。これまでの支援総額は 5 億円を超える。医療機器の整備によって、病院へ行けば相応の治療が受けられ、治療成績も上がった。しかし、原発から 70Km のナロジチ地区住民の病気発生率はいっこうに改善せず、人々の困難は続いている。原因は放射能による内部被曝である。ナロジチ地区の人々の体内放射能（セシウム 137）は、事故から 15 年経っても数千ベクレルを越えていた。病気の発生と医療支援のイタチごっこが私たちの前に立ちわだかまった。「内部被曝をいかにして減らすか」が課題だった。さらに、かつては畜産と農業が主な産業だったナロジチ地区は 95%の土地が汚染され農業ができなくなった。今も約 1 万人が暮らすナロジチの復興をいかに行うのか。汚染された土地の改善が全ての鍵だった。様々な調査と研究を重ね、ウクライナ国立農業生態学大学との共同研究によって、2007 年から「ナロジチ再生菜の花プロジェクト」は始まった。

土壌浄化とバイオエネルギー生産

事故から 20 年以上経過して、放射能は地表から 20~40cm まで拡散し、空間線量率は大幅に低下していた。同時に表土剥離などの対策は不可能である。放射性セシウムなどをよく吸収する植物（ナタネ等）を栽培し、その吸収力で土壌中の Cs137 などを減らす、という「バイオレメディーション」の手法を採用し、時間をかけて土壌を浄化することにした。同時に、生産された菜種油でバイオディーゼル燃料を作り、トラクターやコンバインの燃料を自給する。分析の結果、菜種油には放射能が含まれず、利用は可能だった。放射能は全て油粕に含まれる。菜種の茎や葉等のバイオマスと油粕など放射能を含むものは、バイオガス原料として利用する。土壌中の放射能は植物を介して、最終的にはバイオガス装置から排出される廃水に含まれ、ゼオライトで吸着したのち、低レベル放射性廃棄物として永久保管する。これが菜の花プロジェクトの全貌である。チェルノブイリ救援・中部にはこうしたバイオエネルギーの技術を以前から実行し、脱原発に向けた努力を永年続けてきた仲間達がいた。それが大きな力になった。

厳しい現実と新たな展望

5 年間の菜種栽培で土壌中の放射性セシウムが

大幅に減少することはなかった。減少度合いは年間 3~5%に留まる。これが結論である。菜種は確かにセシウムを吸収し汚染した。しかし、1 トンの土壌から 1 年間で 1 t の菜種を収穫することは出来ないからである。土壌浄化には 30 年以上を要する。期待は裏切られたかに見えた。しかし新たな発見が展望をもたらした。菜種は連作障害があり、同じ場所に毎年続けて栽培できず、間に 3~4 年間おかなければならない。その間は小麦やライ麦、蕎麦などの裏作作物を栽培する。分析の結果、汚染した菜種の裏作作物は殆ど汚染がないか、大幅に汚染が少なくなっていた。食用や家畜飼料として利用出来る汚染レベルだった。菜種と裏作作物の輪作によって汚染土壌における新たな農業の可能性が開けたのである。こうした成果をもたらしたのは、共同研究を行ってきた国立シトーミル農業生態学大学のディードゥフ准教授らの努力である。

汚染地域を新たな農業の基地に

チェルノブイリ事故から 26 年経ったウクライナのナロジチ地区は、10,000 ヘクタール以上の土地が荒地のまま放置されてきた。土壌汚染レベルが高く、農業が禁止されてきたからである。人々は自家栽培の野菜を食べ、汚染した家畜を養って暮らしてきた。この土地で菜種によるバイオエネルギー生産と裏作作物による農業ができれば、新たな展望が開ける。すでに私たちは菜種油で生産したバイオディーゼル燃料で畑を耕し、コンバインで収穫をしている。バイオガスは近くの畜産農場で利用する。困難はあったがこの 5 年間でこうしたシステムが完成した。これまでの菜種栽培は、裏作作物を入れても 18ha に過ぎない。これを大規模に展開し、ナロジチ地区の復興につなげるのが今後の課題である。住民がエネルギーを自給し安全な作物を作れるようになれば、チェルノブイリの悲劇は新たな展望につながるだろう。この 2 月、私たちはウクライナを訪問し、シトーミル州の農業担当副行政長等と会談した。この間の成果を生かし、今後汚染地域の復興を目指して大規模開発を行なう、ということで一一致した。チェルノブイリでのこの経験を、福島にも生かしたい。最後に一言。

そもそも原発がなければこうした悲劇は起こらなかった。このことを忘れてはならない。原発は、事故がなくても永遠に廃棄物問題を抱える、時代遅れのエネルギーなのである。（河田）



番組内容紹介

「放射能汚染からの農業再生」

(河田昌東さん出演)

～3月10日放映 NHK Eテレ 復興サポート

＜地域ミーティング＞より～ (池田 光司)

福島第一原発事故による“農地の放射能汚染”は、農業を営む人々にとって計り知れない困難をもたらしました。番組の冒頭、手を入れることができず荒れてしまった南相馬市の田が、映し出されます。南相馬市では、昨年、市内全域で米の作付が禁止されました。“この困難にどう立ち向かっていけば

いいのか”、番組の企画を通して、地元有機農家の方々と河田さんとの間で、対話の場が設けられました。番組では、この対話の場を中心として、“農地の放射能汚染”に対するチェルノブイリでの取り組み、福島での取り組み、取り組みを通して得られた知見、地元有機農家の人々の思い、そして河田さんの思いが、分かりやすく丁寧に紹介されていきます。とても内容が濃く、是非、再放送して欲しい番組です。紹介したいところはたくさんあるのですが、紙面の都合上、特にポイントとなるところと印象に残ったところを紹介します。

＜チェルノブイリの経験を活かす＞

「福島は、ゼロからのスタートではない。チェルノブイリで得た経験を活かしたい」と語る河田さん。菜の花プロジェクトの内容を中心として、現場を大切にしてきた河田さんの研究姿勢が紹介されます。この思いは、次に示す福島県須賀川市での取り組みに生かされることになります。

＜福島県須賀川市における米作りへの挑戦＞

福島県須賀川市で、米作りに挑戦した伊藤さん。「放射性セシウムは、土に固着した分は作物に吸収されず、土中の水分に溶け出した分のみが吸収される、性質のよく似た栄養分カリウムとともに吸収される、そして水の動きとともに動く」チェルノブイリの経験に基づいた河田さんのアドバイスを受けて、ゼオライトやカリウム肥料を使った、さまざまな実験が繰り返されます。迎えた秋、数多くの知見とともに、汚染されていない米が収穫されたこと（341 枚中 134 枚の田で1 Bq/kg以下）が、報告されます。

*残念ながら、この後、南相馬市では、今年も市内全域で米の作付が禁止されました。

＜農業再生の可能性＞

有機農家の方々にとって、何十年もかけて育てた“土”、それは“命”そのものです。その“土”が、放射能で汚染されてしまった。伝えきれない“思い”が、画面を通して伝えられます。“希望”はどこに。作物には、放射性セシウムを吸収しやすいものと、しにくいものがある。放射性セシウムの吸収を防ぐ手立ではある。工夫次第で農業ができるのではないか。河田さんとの対話を通して、人々の表情が変わってきます。「もみ殻」を使って、放射性セシウムを吸着してはどうか、菜種・エゴマ・ヒマワリを栽培して、特産となる油を作ってはどうか…。番組の最後に、挑戦を始めた人々の姿が映し出されます。

＜風評被害への対応＞

「いくら低い数値（例えば1 Bq/kg以下）を示しても、消費者の放射能に対する不安を取り除くことはできない。福島産というだけで、消費者が逃げていってしまう。」出席者から、厳しい現実が語られます。消費者の信頼は得られるのか。ひとつの解決の方向が示されます。伊藤さんの田では、昨秋収穫祭が開かれ、例年を上回る50名近くの消費者の人々が集まったのです。「顔の見える関係の中で、作る過程も含めて科学的なデータを示していく。家族で自信を持って食べられるものを作って出す。そのことを情報発信していく。」…伊藤さんの言葉です。

＜今後に向けて＞

最後に、河田さんが語りかけます。「放射能に立ち向かうとき、大切な心構えがあります。それは、“無知の知（ここまでは分かった、ここは分からない、ここが不安なところだ）”を知ることです。そこから、先（放射能との向き合い方）が見えてきます。」この言葉は、出席された方々だけでなく、すべての人々に向けて発せられたと思います。



クリスマスカード 完了報告

お久しぶりです。カードキャンペーン担当の柿野です。春になり、ようやくこの頃、暖かくなってきましたね。入学式のころに合わせての桜の開花が楽しみです。

さて、前回は残念な結果となり、大変心苦しい報告をしなければならなかったのですが、今回は、喜ばしい報告をさせていただきます。

2月13日、ホステージ基金から「ついにクリスマスカードが私達の手元に届いた」との連絡がありました。その後、ウクライナを訪問された河田さんと兼松さんが、カードを子ども達に渡す場に立ち会ったそうです。私自身は、直接子ども達の様子を見届けることはできなかったのですが、きっと子ども達の笑顔を引き出すことができたことと信じています。現地のクリスマスが1月7日ですから、約1か月遅れのクリスマスになりますが、届いたと聞いたときは、安堵が先に来てしまいましたよ。それにしても、すんなりと事が運ばなかった分、嬉しさも2倍ですね。支援してくださった方も、さぞ気を揉まれたことかと思います。皆さまのご支援に、深く感謝を申し上げます。ありがとうございました。

現在は、お礼状を作成中です。チェルノブイリの子も達が、お返しとして描いてくれたカードやイラストを添えて、送りたいと思っております。先日事務所に届いた子ども達の作品を見て、しみじみと思ったのですが、本当に子ども達は、想像力豊かですね！ また、「絵のタッチにお国柄がでるなあ」なんて思ったりします。数に限りがあるので、編集・プリントしたものになってしまうかもしれません。皆さんも手元に作品が届いたら、じっくり眺めて見てくださいね。本当に素敵ですよ。

カードキャンペーンは、2012年度も行う予定です。担当者は代わりますが、引き続き、2012年カードキャンペーンへのご協力をよろしくお願いします。そして、半年間、担当を務めさせていただき、本当にありがとうございました。末筆となりますが、新年度、皆さま方の新たな出発を祝して。(柿野)

「第4の革命」上映会と 3.11 追悼集会&パレード in 豊橋

わたしたち「さよなら原発東三河ネットワーク」では、3月4日(日)豊橋文化会館で「第4の革命 エネルギー・デモクラシー」の上映会をしました。昨年の鎌仲監督の核3部作に続いて、4回目の映画会です。毎回3度の上映で、映画と映画の間に講師をお招きして、ミニ講演会をしています。今回は、再生可能エネルギーのエキスパート、原富男さんにお話をいただきました。伊那での間伐材等を利用したベレットストーブ、酪農家が活用している原さんが作ったBG装置、ウクライナでの菜の花P.Jの話など多岐にわたり、質問もたくさん出ました。映画がまだあまり知られてないせいか、入場者は延べ200人でしたが、とてもいい映画だったという感想が多く寄せられました。

1週間後の3月11日(日)は、豊橋駅前広場で「3.11 追悼 なくそう浜岡原発東三河集会」としてパレードをしました。3.11以後にできた全く政治色のない3つの脱原発で集まった市民団体と、共産党系の団体とで実行委員会を作り、成功させました。共産党系の組合と組んで集会をやるのは、豊橋では初めてです。全国的にも珍しいことではないでしょうか。1万2千枚のチラシを作り、記者会見もして新聞でもPRしてもらいました。13時30分から、和太鼓・おやしバンド・地元のプロのミュージシャンのソロ・合唱団などのステージに続いて、14時46分黙祷の後、4団体代表のアピール、最後に双葉町から安城市に奥さんと9ヶ月の長男と避難している大沼勇治さんから、被災地の生々しい状況が報告されました。そしてパレード(デモとは言わない)。組合の旗の乱立に違和感を覚えましたが、ベビーカーを押した若いお母さん達や手作りのプラカードもあって、38万都市での350人のデモは、今後に期待が持てます。集会参加者は、中日新聞発表で650人。手前味噌ですが、私たちの団体が作った「移動人間ポスター」が好評でした。30枚の脱原発ポスターをプラダンに貼って首から下げ、30人が横並びに並んだのでした。(橋本)



竹内さんのウクライナ便り

3月11日、昨年日本で震災の発生したその時刻は、キエフでは午前7時46分でしたが、ウクライナ日本センターと在ウ日本大使館の呼びかけにより、都心のオペラ・バレー劇場前で追悼の集まりが持たれました。

各人がろうそくを持参、火をともして手にし、11分間の黙祷をするというもの。私は妻と参加しましたが、劇場に近づいていくと、予定の時間よりやや早くすでに黙祷が始まっていました。日本語を勉強している学生ら若い人や、キエフ駐在の日本人及びその家族と思われる数十名の参加。みぞれが降り風のある中で、ろうそくの火は何度も消えてしまい、それを点け直しているうちに時間が過ぎてしまいました。参加者らの写真を撮っている人たちが何人かおり、あとになってわかったのは、その中に昨年「救援・中部」のナタネプロジェクトを取材した日本の某通信社のモスクワ特派員O氏もいたということです。その時は全く気づきませんでした。そもそも私の傾向として、街なかを歩いている時、知人に出くわす可能性というのを無意識のうちに排除しているらしく、周囲の人にはほとんど注意を払っておらず、「竹内さん」と声をかけられて驚くのが常です。

この日夕刻同じ劇場で、東日本大震災とチェルノブイリという二つの惨事を追悼するコンサートも行われ、また3月13日には、震災後日本への支援をさまざまな形で行ったウクライナの諸団体や個人への感謝を表明する日本大使館主催のコンサートとレセプションが、やはり都心のフィルハーモニー・ホールで催されました。13日のレセプションには、我々の協力者であるジトーミルのホステージ基金のキリチャンスキー氏やドンチェヴァ氏、「チェルノブイリの消防士たち」のチュマク代表も招待されており、私はホステージ基金に書類を渡す都合があったので少しだけ顔を出しましたが、かなり多くの人たちでフィルハーモニーのロビーはいっぱいになっていました。あとでドンチェヴァ氏に聞いたところ、ジトーミルの彼らは日本酒をなめ、鮎をいくつかつまんだものの口に合わず（2月



<2月訪問ではジトーミル市内の学校で歓迎を受けた。>

の日本行きで和食に馴染んだドンチェヴァ氏を除く）、車でジトーミルに戻る途中お腹が空いてしまい、路傍のレストランに立ち寄って、ウクライナ料理とウォッカで飲み直した（？）ということです。

ちなみにここ数年、ウクライナでは日本料理を出す店がやたらに増えており、その中にはロシア資本のものもあるそうですが、チェーン店だけで「ヤキトリヤ」「スシヤ」「ムラカミ（「村神」と漢字をあてる）」「日本の家[直訳]」「鮎の惑星[直訳]」などがあります。基本的に日本食に郷愁を持たない私は、自らこういう店に行きたいと思ったことがないのですが、つきあいでたまに行くと、これらのチェーン店のメニューは、アメリカ合州国起源（？）と思われるスシが主で、アボカドやマヨネーズ、チーズを用いた巻物があり、その名も「フィラデルフィア・ロール」「カリフォルニア・ロール」など。まあ、新鮮な海産物の供給には初めから無理がある土地柄なので、そういうことになってしまうのかもしれませんが。驚くべきことにこれらの店はそこそこ流行っている様子で、若い人たちや家族連れが箸を使いながらテンプラやスシをつまんでいます。しかし、失礼ながら、こういったチェーン店で出される料理を、私はおいしいと思ったことがありません。日本人の板前さんが働いているような高級日本料理店（に行ったことは稀にしかありません）に比べれば、値段はずっと安いのですが、同程度のお金を払えば日本ではそれなりのものが食べられることを思うと、どうもだまされたような気がしてしまいます。（3月28日）

事務局便り (カード、2月13日に、やっとジトメールに無事届きました。ご協力くださった皆様にはご心配をおかけしました。1カ月遅れのクリスマスカード。でも、よかった。)

「中部NGO おうえん募金」をご存知でしょうか？ WEBサイトで、NGOの活動を伝え、それへの理解を広め、NGOの活動を寄付金やメッセージで支える「活動」のひとつです。20年以上にわたり、名古屋でNGOのネットワーキングや様々なNGOの活動を多岐にわたって支える、「名古屋NGOセンター」が運営し、その加盟団体であるチェル救も、この「おうえん募金」対象団体として参加しています。募金は、応援したい分野（例えば、教育・医療・人権・東日本大震災支援等々）を選ぶことで、どの団体に寄附してよいか迷う場合でも、その寄附の意向に沿った団体におくことができます。チェル救でも、すでに東日本大震災の被災地支援を行っているNGOへのご寄附60万円のうち、94,582円をご支援いただき、南相馬での活動を支えていただいています。いろいろなNGO団体で分け合い、活用できる募金です。寄附の仕方は、ネットで「NGO 募金 中部」**検索**。または、チェル救ホームページをご覧ください。(山盛)

本の紹介 「終りのない惨劇～チェルノブイリの教訓から」

ミシェル・フェルネクス 他著(竹内雅文:訳) 緑風出版 定価 2,320円/税込

本書は、原子力発電所の事故そのものを扱ったものではなく、それによる健康被害がどのようにして無視され、被害者たちの命が、人権が、どのようにして踏み躪られてきたかを語る本です。国際社会はいったいどうして、チェルノブイリによる何万人かの死者たちの存在を、いっさい語らずに済ませることができてきたのでしょうか。

本書の著者、ミシェル・フェルネクスさんは、国際社会の中での健康問題のリーダー的役割を果たすべき組織、つまり世界保健機関(WHO)が、国際原子力機関(IAEA)に従属したものでしかないという寒気のする現実を、WHOの一員として多くの報告会議に臨席し、発言もしてきた証人として語っています。また併せて、チェルノブイリによる健康被害への総合的な見通しを、私たちに与えてくれています。チェルノブイリの人たち、また福島の人たちと、心を寄せ合いながら生き抜いていこうとする人たちが、是非とも知っておくべきことがびっしりと詰っている一冊です。訳者はチェルノブイリ救援・中部メンバー。(雅)



編集後記

☆ふと小耳にはさんだ八朔のマーマレードを作りたくなって、一人で3個食べた。聞いたとおりにやってみたのに、何故かジャムができた。気を取り直して、もう3個食べ根性で完成。やればできる！(美)

☆歯の定期検診に行くたびに、師匠(歯科衛生士さんのこと)から歯磨き方法のダメ出しが…。次の検診までに注意されたところの猛特訓。ブラシの持ち方、角度、強さ…鍛錬は続く。(佳)

☆世界の金融界では、ゼーリック世界銀行総裁を始めとする、トップクラスの辞任劇が相次いでいる。無からお金を作り出す詐欺行為を独占してきた、金融マフィア達の夜逃げが始まっているということだ。米国のオキュパイデモ、ロシアの大統領選挙でプーチンが涙の完全勝利、ギリシャ・ポルトガルに続くスペインのゼネスト、中東シリアの反政府暴動不発など、世界の民衆が180°方向転換を始めた。ゴールドマン・サックスやJ.P.モルガンが倒産する日も近い！(J)

〒456-0022 名古屋市熱田区波寄町 20-14

印刷「エープリント」

TEL・FAX (052) 871-9473